

# 視点を変えれば、 世の中は変わる。

たとえば  
半分だけ水の入ったコップを見て、  
もう半分しかない、と思うか、  
まだ半分もある、と思うか。

視点を変えれば、  
世の中の見え方は変わってきます。  
当たり前だと思っていたことでも、  
違う視点から見つめ直してみると、  
新しい発見があることがあります。

Rethinkフォーラムは、  
一人では気づけない  
新しい視点に気づくことで、  
地域活性化のきっかけを見つめる場です。

視点を変えれば、世の中が変わる。  
地域が変わる。  
未来を変える発見は、  
意外と身近に  
あるのかもしれない。



「Rethinkフォーラム～視点を変えれば、世の中は変わる。」(佐賀新聞社主催、佐賀県、佐賀県教育委員会など後援、Rethink PROJECT 協賛)が6月2日、佐賀市のガーデンテラス佐賀 ホテル&リゾートで開かれました。第1部は元陸上選手の為末大さんが「ハードルを越える」と題してトークショーを、第2部では佐賀県の山口祥義知事と医療法人ひらまつ病院(小城市)の峯謙介・広報室部長、進行役のフリーアナウンサー・増田さおりさんが加わり、「Rethink 佐賀 ～スポーツの力を活かした人づくりと地域づくり・SAGA サンライズパーク始動～」をテーマに語り合いました。

## ゲスト



ためすえ だい  
**為末 大氏** (Departure Partners、元陸上選手)

演題：ハードルを越える

1978年広島県生まれ。スプリント種目の世界大会で日本人初のメダル獲得者。男子400mハードルの日本記録保持者。現在は執筆活動、会社経営など。新書『Brillia ランニングスタジアム』。国連ユニタール親善大使。著書も多く、最新刊は7月発売の『熱達論：人はいつまでも学び、成長できる』。

### 「幸せに生きる」ためのスポーツを

一 為末さんは佐賀にご縁をお持ちですね。  
妻の実家が佐賀にあるので、年に1回は佐賀に来ています。今年のお正月も佐賀で過ごしました。子どもと神野公園遊園地にもよく行きますよ。

一 現役アスリート時代は世界の大舞台で活躍されました。陸上を始めた幼少期について教えてください。  
小学生のとき、姉が地元の陸上クラブに入りたと言いつつ、私も姉の後ろをついて行ったのが始まりです。そこで走ってみると私の方が速いと褒められ、「これ、面白いかも!」と思ったんです。当時のスター選手、カール・ルイスへの憧れもあって、短距離走に夢中になり、中学生のときはいつも表彰台に上りました。学校では読書部に入り、本を読むことも大好きでした。

★ 世界で戦うときも「自分らしさ」を大切に  
一 高校時代に100m走から400mハードルに転向されました。どんな気持ちの変化が?  
初めての海外遠征で、ジャマイカの選手たちと競走したらとんでもなく速くて、100mではとても勝ち目がないと思いました。そのときハードル走を見学したら、あまり上手な選手がいなくて。ハードルは複雑な技術と、かなりの体力と根性を要する競技です。日本人でも世界一になれるかもしれないと思いました。

陸上では100mが王道で、ハードルは競技人口が少ないマイナー種目。「短距離がうまくいかなくて、逃がっているのでは?」と思い悩むこともありましたが、「好きなことをやり続ける人生と、より高みに到達する人生、どちらがいいか?」と自問し、頂点を目指す方を選んだんです。自分の価値観をRethinkした瞬間でした。

一 転向後は、世界陸上で2大会連続の銅メダルを獲得し、日本新記録も樹立しました。その途上には、さまざまな障壁があったのでは?  
大学3年のときにスランプに陥り、勝てなくなった時期がありました。当時は陸上が人生の全てだったので、それがうまくいかないとうべてを否定されたような気持ちになり、とてもつらかったですね。

一 コーチをつけず、単身で活動した時期もあったことか。  
この時期、一番困ったのは、自分を客観視できなくなったことです。練習しすぎて休むタイミングが分からなくなったり、間違った練習法を続けてしまったり。たくさんの失敗を繰り返すなかで、人に質問し、話を聞くことを意識して行うようになりました。人の話には不思議なくらい右から左に流れていくので相手に心を向けて、しっかり聞くように心がけて。それが自分を省みりする上で、最も大切なヒントになりましたね。

★ 勝ち負けより 心豊かに楽しむ  
一 2012年の現役引退後は、執筆や会社経営などさまざまな分野で活躍中です。本も20冊以上出版されていますね。  
小学生の頃から本を読むことが好きで、20代半ばから執筆も始めました。同じ言葉を使っても、人それぞれ受け止め方が違うから面白いんですよね。例えば「虹」という一言でも、色によって2色だったり10色だったり、色彩のイメージは異なります。

子どもたちにハードルの跳び方を教えたとき、良かれと思って「右手を前に出し、左手は90度で、足は…」と技術を細かく伝えたら、子どもたちが混乱し口ポツみたいな動きになりました。そこで「ハ

ードルの上に横があるから、突き破るように跳んでごらん」と言い換えたほうがうまくいったんです。コーチの一言でぱっとイメージが湧き、動きが自然と引き出される。そんな言葉を見つけるのがとても面白いですね。

一 相手の視点に立つことで、スポーツに対する視点も変化したのでは?  
スポーツの定義は広くて曖昧です。教科書では「勝ち負けやルールがあり、時間や空間に制限があること」ですが、私の定義は「身体と環境の間で遊ぶこと」です。スポーツを自由に楽しむことで心身が健やかになり、周囲の人とのコミュニケーションが生まれ、孤独も和らぎます。頂点を目指すことだけがスポーツではなく、日常生活の中で散歩しながらのんびり楽しむのもスポーツ。日本の「スポーツ観」をもっと柔らかく広げていき、多くの人が幸せに生きるためのスポーツへと発展させたいですね。

一 人生百年時代。アスリートの引退後の生き方も注目されています。今後どのようなスポーツの在り方が求められるのでしょうか。  
引退した選手のセカンドキャリアは世界的な課題であり、これからの時代に欠かせないテーマです。指導者になって若者の才能を伸ばし、世界の頂点を目指すことも一つの方法です。しかしもう一つの視点として、例えば60歳で水泳を始めた人が80歳になっても泳ぎ続けられるようサポートすることを目標にしてみたい。これまでの発想を切り替え、多様な人々がスポーツを楽しみ、目標としていることに寄り添うのです。また、アスリートの経験を社会に還元する仕組みづくりも必要でしょう。

海外での経験から、日本ほど安全な国はないと実感しています。小学生が歩いて通学できるのは、おそらく日本だけでしょう。それは地域の人たちがお互いを支え、信頼関係があるから実現できることです。そんな幸福な社会をつくる上でも、スポーツはもっと貢献できると思っています。

## テーマ「Rethink 佐賀 ～スポーツの力を活かした人づくりと地域づくり・SAGA サンライズパーク始動～」

モデレーター  
パネルディスカッション出演者 為末 大氏、山口 祥義氏(佐賀県知事)、峯 謙介氏(医療法人ひらまつ病院 広報室部長)、増田 さおり氏(フリーアナウンサー)

### 人々が集い交流するエリアへ

増田 今年5月にSAGAアリーナがオープンしました。  
山口 多くの県民の皆さんの祝福と、プロバスケットボールチーム・佐賀バルーンズのB1昇格、B2リーグ優勝という快挙も相まって、最高の船出となりました。優勝を決めた、長崎ヴェルカとの九州対決では、B2リーグ過去最高の観衆が詰めかけ、歓喜の渦に包まれました。

オープン以来、トップアーティストのコンサートなども続々開催され、ライブハウスのような圧倒的な臨場感は、まさに新時代のエンタメアリーナ。レセプションや商談などでも活用され、さらにサンライズパーク全体をつなぐランニングコースやパークテラスなど、みんなが心地よく楽しめる工夫が随所に施されています。このエリアは、非日常と日常が交わる空間です。

国スポのことだけを考えれば、大きめの体育館を作ればよかったのです。しかしそれでは、国スポ後にスポーツ以外ではほとんど利用されない。そうではなく、海外のように試合を観ながらお酒を飲んだり、食事をしたり、ビジネスシーンも広がる「稼げるアリーナ」を目指しました。そして、そこで生み出される収益が佐賀県のスポーツに、アスリートに還元される。

る。そうしたシステムを作り上げていきたいという思いがありました。  
為末 ヨーロッパのスタジアムは試合前から観客が集い、お酒や会話を楽しむ社交の場になっています。SAGAアリーナも同じ雰囲気を感じます。スポーツに関わる人のうち「スポーツをする人」は20%、残り80%の「観る人」の方が圧倒的に多いんです。スポーツ立県を目指すなら、観る人に楽しんでもらう工夫は重要でしょう。

スポーツが人を育て まちを元気にする  
増田 佐賀県では、「スポーツピラミッド構想(SSP構想)」を掲げ、アスリートの育成・支援にも力を入れています。  
山口 「SSP構想」のもと、佐賀県ではトップアスリートの育成とともに、スポーツ人口の裾野を広げながら人づくりを進めています。すでに様々な大会で、佐賀県の選手が目覚ましい活躍を見せています。昨年は県内外の高校生を受け入れる「アスリート寮」を県内3箇所に設置し、さらに女性選手の健康管理に配慮した「女性アスリート外来」も開設しました。こうした取組は、民間企業や医師会などと連携して実施しており、佐賀県の大きな強みとなっています。

▲ 当院には5競技のアスリート部があり、理学療法士や作業療法士がトレーナーとなって選手たちをサポートしています。また、佐賀県トレーナー協会に所属し、ボランティアとして高校の部活動を中心に支援しています。  
増田 国も「スポーツによるまちづくり」を推進しています。佐賀はプロスポーツも盛んで、スポーツを通して地域の交流が生まれています。

為末 私は東京で、障害の有無や年齢、性別に関係なく、誰もが練習できるランニング施設を運営しています。利用者の1〜2割はパラリンピック選手など障害のある人たちです。最初は義足を着けた選手に驚いていた子どもたちも、数日後には日常の風景になりました。聴覚障害のある人とはスマホの画面上でコミュニケーションし、打ち解ける人もいます。特別な配慮や理解を促さなくても、同じ場所で同じスポーツをする上で、みんなが自然と慣れ親しみ、共生できるのです。

▲ 当院ではアスリート部を中心に、まちの清掃活動に取り組んでいます。病院は地域の人と身近に接する場所なので、地域貢献にもなります。選手が気持ちを整える効果もあって考えました。地道な活動ですが、スポーツをする上で欠かせないメンタル面の向上にもつながると感じています。

人生を豊かにする地域を目指して  
増田 最後にメッセージをお願いします。

為末 日本のスポーツ界も今、大きく変わりつつあります。皆さんもぜひ「自分たちも楽しんじゃおう!」という感覚で積極的に関わってほしい。私も来年の大会を楽しみにしています。  
▲ スポーツで人や地域を育てるSSP構想に共感しています。私たちが先導役となって選手たちをサポートし、ともに佐賀を盛り上げたい。大会を機に佐賀が一気に盛り上がり、佐賀の魅力である「人」を広くアピールできるよう貢献したいと思っています。

山口 来年開催される国スポ・全障スポを全力で盛り上げます。ただしこれはあくまでも通過点。むしろ大会後、いかにスポーツをすべての人たちの生き生きに変えていけるかが重要です。佐賀で育った選手たちが、将来は指導者として、新たな人材を育成し、佐賀のスポーツ文化を継承していく。そういう好循環を創り出していきたいと思います。

佐賀県には、サッカーのサガン鳥栖、バスケットの佐賀バルーンズ、バレーボールの久光スプリングスという3つのプロスポーツチームがあり、それぞれがJ1、B1、V1というトップリーグで戦います。そうした恵まれた環境の中で、これからさらにスポーツの持つ感動の輪を広げていき、この佐賀県を、誰もがスポーツを楽しみ、人生を豊かにできる地域にしていきたいですね。

